



文様って、おもしろい

特集展

板締の世界

いずも あいいたじめ きょうべにいたじめ ちゅうごく あいぎょうげら
出雲藍板締・京紅板締・中国藍夾纈

2014年6月6日【金】～7月6日【日】

古代出雲歴史博物館

日本の板締染

板締染とは文様を彫った版木と版木の間に布を挟み、これを締め付けて染める染色技法です。古代に中国（唐）からその技術が伝わり、正倉院にはこの技法を用いて作られた襷が残されています。しかし、平安時代中期には衣裳の主流が織物に変化したことなどにより、この技法は廃れてしまいます。

板締染が再び用いられるようになったのは江戸時代で、庶民が用いる「藍」と「紅」の文様染め、すなわち出雲藍板締、京紅板締として復活しました。

出雲藍板締とその技法

出雲藍板締は、現在のところ、江戸時代末期に出雲市大津町の板倉家で行われていたことが唯一確認できます。木綿が庶民の織物として普及するにつれて行われるようになったものと想定されます。その製品は仕事着や手ぬぐい、浴衣などに用いられました。

しかしながら、藍板締は、京紅板締にくらべて量産に適していなかったこと、また型染めや絞りに比して補助的な技法とされていたことなどから、明治初年には行われなくなり、現在では、その製作技法が十分には明らかにされていない、いわば幻の技術となっているのです。当館には、藍板締染に用いられた2600点を超える版木や製作道具などが収蔵されており、これらの資料は平成22年（2010）に国の登録有形民俗文化財になりました。

出雲藍板締の版木には両面に文様の彫られた版木と片面のみに文様の彫られた版木があります。前者は20数枚の版木を1セットとして、版木の間に布を取め、締め具で版木を固定して染めます。仕上がりは地染まり（地の部分が藍に染まる）になります。後者は40数枚の版木を1セットとします。文様が彫られていない版木を背中合わせにして、この2枚を1単位として、2枚ごと交互にずらしながら、その間に布をおさめ藍で染め上げます。仕上がりは地白（文様のみが藍に染まる）となります。当館に所蔵されている版木の大半は片面彫りの版木です。

（注）資料名に○が付してあるものは国登録有形民俗文化財。製作年代の記載のない資料のうち、藍板締関係資料は19世紀（江戸時代）、紅板締関係資料は19世紀（明治時代）である。なお、注記のないものは当館蔵である。

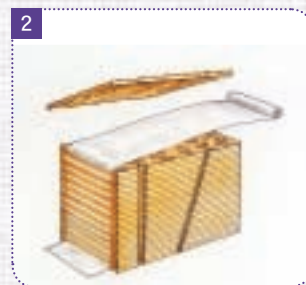


○竹に虎文様木綿布

○藍板締版木:竹に虎



藍板締
井桁崩文様野良着
19世紀(明治時代)



- 1 藍板締 地白版木
木綿布巻き上げイメージ
- 2 藍板締 地染まり版木
木綿布巻き上げイメージ
- 3 藍板締 締め具装着
イメージ



19世紀
紅板縮内着(麻の葉)
(個人蔵)

京紅板縮とその技法

京紅板縮染は、江戸時代中期から大正時代末期に京都で行われていた板縮染技法の一つです。その製品は基本的には表向きの衣裳ではなく、小紋の下の内着や襦袢などに用いられたと考えられます。嘉永年間（19世紀半ば）には隆盛を極めました。明治になって合成染料の使用され始めたことを一つの契機として、その堅牢度の問題、友禅の量産化の実現、染色技術の機械化などから需要が減少し、廃れました。当館には、紅板縮染に用いられた版木およそ2500枚が収蔵されています。

版木の材質は杉の木で、版木には両面彫りと片面彫りの2種類があり、どちらも補強のため漆が塗られています。両面彫りの版木の場合は10数枚、片面彫りは20数枚を1組として、この1組に1疋（2反分）の布（絹・木綿など）をおさめます。染色にあたっては、一度に3組分の版木を締め枠に固定し、締め枠を大きな桶に入れ、柄杓で紅花液（後に人工染料）を何度もかけて染め上げます。一度に6反（大体6人分の衣裳分）染めることができる量産技法でした。

板縮染が行われた理由

板縮染は防染の方法が困難で、また文様を版木に彫り込むために、その文様の表現には限界があります。それにも関わらず、なぜ板縮染が行われたのか、いくつかの理由が推測できます。

- ①木綿が庶民の織物として普及してきた江戸時代に、一度に長尺の連続文様を染めることができ、また版木は何度も使用できるなど、量産に適した技法であったこと
- ②出雲藍板縮、京紅板縮では、両面に文様を染めることができたこと
- ③出雲藍板縮では、容易に地白に染め上げることができたこと

板縮の文様

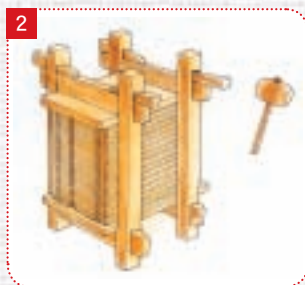
当館に所蔵されている藍板縮版木には176種類の文様、紅板縮版木には約330種類の文様があり、江戸時代末期の庶民が用いた文様の宝庫といえます。文様のモチーフは松竹梅などの吉祥文が中心ですが、なかには『源氏物語』や『伊勢物語』などの王朝文学や、能の演目などに背景を持つものがあります。また、緋文様など江戸時代後期に各地で生産されるようになった緋を板縮で表現しようとしたものや、旗など明治時代以後と思われる新しい文様もあります。



紅板縮内着
桜・撫子・菊・麻の葉
19世紀（個人蔵）



紅板縮内着
お捻じ梅・桜・「福」
19世紀（個人蔵）



紅板縮の製造工程

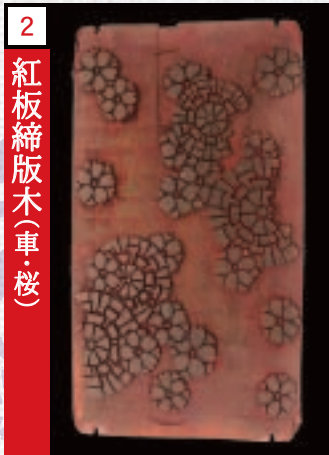
- 1 1組の版木に布をおさめる
- 2 版木を締め枠に固定し、楔を打って締めつける
- 3 紅花液で染める

吉祥文

吉祥文には多くの種類がありますが、それが吉祥とされる由来は、大きく3つに分けることができます。

- ①背景にある伝説（「菊水」など）
- ②モチーフそのものの性質（「松」「竹」「梅」など）
- ③語呂合わせなどによるもの（「蝙蝠」など）

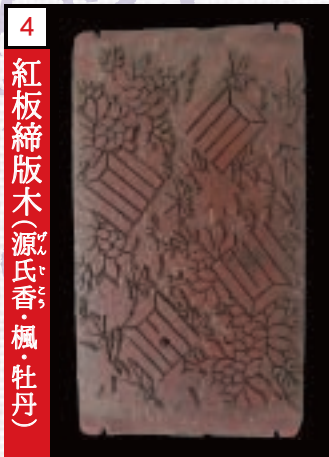
吉祥文がちりばめられた衣裳を身につける背景には、家の繁栄や子どもの成長などが期待されていたものと思われま



2 紅板縮版木(車・桜)



車は御所軍の車輪だけを文様化したもの。御所車は平安時代の貴族が乗った牛車だが、『源氏物語』の世界を象徴するものとして源氏車とも呼ばれた。雅な王朝文化への憧れが背景にある文様である。



4 紅板縮版木(源氏香・楓・牡丹)



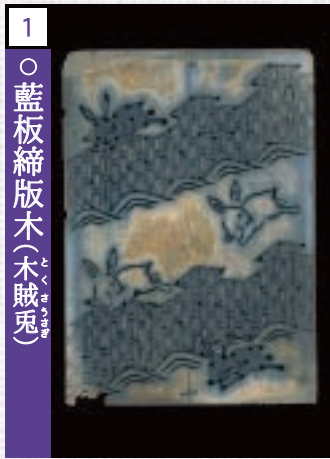
源氏香は5種の香りを聞き、その香りを聞き分けるといふ香である。香を聞くたびに右から順に縦線を引き、同じ香りであればこれを横線で結ぶ。その結果の符号が『源氏物語』の桐壺と夢浮橋を除いた52帖になぞらえられる。この符号が文様化されたものである。



6 紅板縮版木(八橋)



『伊勢物語』第9段「東下り」に、三河国八橋の地で杜若を見て、杜若の五文字を句の上に置いて歌を詠んだとあるが、これを背景にした文様である。



1 藍板縮版木(木賊兎)



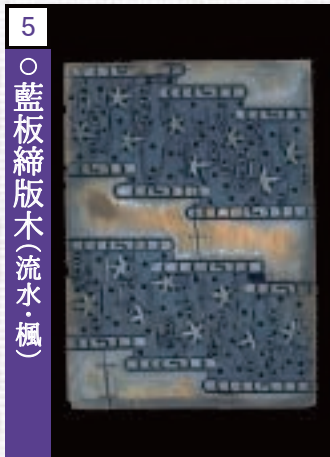
謡曲『木賊』に「木賊刈る園原山の木の間より磨かれ出づる秋の夜の月影をも…」とある。木賊の茎は物を磨くために用いられたが、木賊→磨く→明るい月(満月)→兎(月に住む)と連想されて木賊と兎が結びついたとされる。



3 藍板縮版木(波兎)



謡曲「竹生島」に「月海上に浮かんでは兎も波を走るか」という一節があるが、これを背景に成立した文様である。



5 藍板縮版木(流水・楓)



流水に紅葉を散らした文様だが、この組み合わせの文様は、多くの歌に詠まれた紅葉の名所「竜田川」(奈良県)が念頭に置かれている。



7 紅板縮版木(月文字桜・雪華文)



雪華文は雪の結晶を花に見たてたもので、江戸時代末期にこれを図示した書物が刊行されたこともあり、人気の文様となった。この版木では、日本の美の代表として「雪月花」が表されている。

8 紅板締版木(緋)



緋はあらかじめ斑に染めた糸を織る技法で、江戸時代後期には各地で生産された。この技法による幾何学文様の織物も緋と呼ばれるが、この文様を板締で表したものである。鮮明かつ安価にこの文様を染めることができたからだろう。

9 紅板締版木(旗・錨・撫子)



軍旗は明治時代以後の新しい文様と考えられ、紅板締が明治時代まで行われていたことを物語る文様である。なお、錨は婚家にしっかりと錨を下ろすようにとの意味もあるという。

10 藍板締版木(蝙蝠・井桁・梅・扇)



蝙蝠の「蝠」の字と「福」が同音であることから、中国などでは蝙蝠は吉祥とされた。さらに「蝙蝠」を多く散らすことで多福が暗示される。

11 藍板締版木(蝶)



蝶は舞飛ぶその華麗さとともに、中国では「蝴蝶」の「蝴」が「福」と同じ音であることから福を意味する吉祥とされた。

12 紅板締版木(松竹梅・「寿」文字)



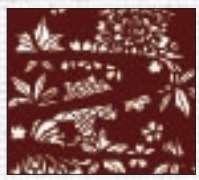
冬の寒さの中で、常緑を保つ松と竹、春の先駆けとした花開く梅、これら三つを合わせた松竹梅は吉祥の代表である。この版木には、加えて「寿」の文字が彫られ、めでたさを増幅させている。

13 藍板締版木(宝尽くし小櫃)



小櫃はダイコク様の持ち物で、打ち振ると望むものが出てくるとされる。この小櫃に宝珠(望みの物を出す)、鍵(蔵を開ける→福德)、米俵、隠れ蓑・隠れ笠(他人から見えなくなる)などを加えためでたい文様である。

14 紅板締版木(流水菊・桜楓)



菊は一般に長寿の象徴であるが、経文を菊の葉に書き、そこから滴る露を呑むと不老不死になると伝えられることから、とりわけ(流)水と菊を組み合わせた文様、「菊水」は吉祥とされた。

15 紅板締版木(蕨)



蕨は四方八方に伸び、何にでも絡みつく。この生命力から吉祥を表す。また客に絡みついて栄えるようにと客商売などで好んで用いられたとされる。

中国藍夾纈

中国藍夾纈は、浙江省南部で20世紀半ば頃まで盛んに行われていた藍板締染です。随・唐代には文様の彫られた版木を用いて多色染をする夾纈の技術が発展し、唐代には諸国の遣唐使に記念品として贈られていました。しかし、この多色染の夾纈の技術は廃れ、中国国内にはこの夾纈で染められた綾自体もほとんど現存していません。

元代末期、上海出身の黄道婆が木綿の栽培の推進と紡織機具の改良、紡織技術の革新を行い、その結果、木綿を染める技術が発展したとされています。その流れをくむ技法の一つが藍夾纈で、地を藍に染め、文様を白く染め出す地染まりの技法です。

藍夾纈製品は基本的に、結婚用の寝具（布団表）として用いられました。夫婦は縫い繕いながら、数十年、あるいは一生この布団表を用いたようです。

1950年代までは200を超える藍夾纈の工房が存在していましたが、1970年代に一度下火になりました。しかしながら、1980年代に復興し、現在3工房で藍夾纈の伝統が受け継がれています。藍夾纈は2011年に中国の第3次国家級無形文化遺産リストに登録されています。

藍夾纈の文様

藍夾纈は、手織りの木綿布を版木で夾み、藍で染められます。花鳥などの吉祥文の入った古代の多色染の夾纈とは異なり、藍夾纈では、多くの子どもを授かることを祈念した文様や、清代末期から中華民国の初期にかけて流行した京劇など戯劇の内容を表す文様が用いられています。戯劇の内容を文様にするすることで、喜ばしい将来が祈念されたようです。藍夾纈の版木製作者の職人は、民間芝居の頭取を兼ねることが多く、このことが藍夾纈の文様の形成に少なからぬ影響を与えています。

藍夾纈 福祿寿喜被面

1850年代（張琴氏蔵）

被面(布団表)が夫榮、妻貴など16種の文様から構成されている。より良い将来への祈念・期待が文様に込められている。例えば左側1列の文様の意味は上から

- 祿(鹿)
発音の類似から鹿は祿につながり吉祥
- 魚跳龍門
いわゆる登龍門で立身出世につながり吉祥
- 鳳穿牡丹
鳳凰と牡丹(富貴の象徴)の組み合わせで、幸運、美しさ、富を象徴する吉祥
- 福(蝴蝶)
蝴の音が福と同じであることから吉祥

となる。





藍夾纈 ^{えいぎ}嬰戲図被面
(百子図)
1910年代
(張琴氏蔵)

布団表が16種の嬰戲図から構成されている。図により子どもの数は異なるが、合計100人描かれ「百子図」と呼ばれる。中国では子どもが多ければ多いほど嬉しいと考えられたことからこの文様が用いられる。



藍夾纈版木
(演劇人物)
19世紀(清代)
(張琴氏蔵)

土産用ではなく、布団表用として実際に藍夾纈に使用された版木の残存は少なく貴重である。この版木は2枚1組で用いられ対称文様となる。

藍夾纈の技法

藍夾纈の製作工程は、版木の彫刻、藍靛（インディゴ）の調製、染色などからなり、そのうち版木の彫刻が肝要とされている。

版木は17枚が1セットで上下の板を除いて両面彫りである。布を二つ折りにし、折り返ししながら版木に夾むため、布には表裏が生じる。1回で16種類の文様からなる布が染め上がるが、これは布団面1枚分に該当する。

彫刻道具	粉本(図案)を版木の上に載せ下絵を描く	版木を彫刻する	文様の線を強調し、藍が通る溝を深く彫る	藍の水路を彫る
文様を紙に写す	版木を水中に入れ保存する	藍を採集する	藍を靛坑と呼ばれる甕に浸ける	腐敗した葉や枝を取り除く
消石灰を加える	泡がでるまで攪拌する	沈殿させる	濾過する	藍靛の完成
染色する布を準備する	布を版木に巻き込む	藍甕に入れる	繰り返し藍甕に入れて染める	表面に付着した不純物を除く
水分を取る	版木から外す	布棚にかけて乾燥させる		

島根県無形文化財

筒描藍染

藍板締を行っていた板倉家では、同時に筒描藍染も行っていました。筒描藍染とは、筒袋に糊を入れ、筆を使うように糊を絞り出しながら描き、文様を白抜きに藍で染める技法です。その製品は、中国の藍夾纈と同様に、嫁入り支度などとして布団表などに用いられました。

筒描藍染はかつて多くの紺屋で行われていましたが、明治40年頃には13軒、昭和40年には3軒となり、現在では出雲市大津町の長田染工場（無形文化財保持者長田茂伸）に伝わるのみです。



筒描藍染 布団表
(鶴亀松竹梅 雪輪に家紋)

20世紀(昭和時代中頃)
(個人蔵)

長田染工場2代目、故長田政雄氏(県無形文化財保持者)の作品。鶴亀松竹梅といった吉祥文を描く。雪輪は出雲地方では女性に用いる文様で、嫁入り支度の際には、実家の家紋を染める。

藍板締・紅板締・藍夾纈の比較

	藍板締	紅板締	藍夾纈
製作地	出雲市	京都	中国浙江省南部
製作年代	江戸時代末	江戸時代中期から大正時代末	清代～
版木の材質	姫小松	朴	紅柴、棠梨木、楊梅樹、楓樹等
版木の状況	片面彫り、両面彫り (片面彫りが大半)	両面彫り、片面彫り	両面彫り、 染色時上下にくる版木は片面彫り
染料	藍	紅花(後に化学染料)	藍
染色時の 1組の版木数	片面彫り版木…40枚程度 両面彫り版木…20枚程度	両面彫り版木…10数枚 片面彫り版木…20数枚	17枚
染め上がりの 特徴	片面彫り…地白 両面彫り…地染まり 両面に文様	地染まりが多い 両面に文様	地染まり 片面に文様
1組の染色で 染め上がる布	1反	2反	布団面1枚分
1回の染色で 染め上がる布	1反	6反	布団面1枚分
用途	てぬぐい・仕事着など	内着・襦袢など	布団面など
文様の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ●吉祥文 ●『源氏物語』などに由来を持つ文様 ●緋文様 	<ul style="list-style-type: none"> ●吉祥文 ●『源氏物語』などに由来を持つ文様 ●緋文様 ●旗など明治以後と思われる新しい文様 	<ul style="list-style-type: none"> ●吉祥文 ●戯劇に由来を持つ文様 ●工農兵など1960年代の新しい文様

石塚 広「近世以後の板締め-藍板締めと紅板締め」(http://kyokechi.web.fc2.com/itajime_notes.html)を参考に作成

特集展:板締の世界-出雲藍板締・京紅板締・中国藍夾纈-

会期:2014年6月6日(金)～7月6日(日)

会場:島根県立古代出雲歴史博物館

文化庁 平成26年度文化庁地域と協働した
美術館・歴史博物館創造活動支援事業



島根県立古代出雲歴史博物館

Shimane Museum of Ancient Izumo

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99番地4

TEL 0853-53-8600 FAX 0853-53-5350

URL <http://www.izm.ed.jp> E-mail: contact@izm.ed.jp

開館時間 9:00～18:00(11月～2月は、9:00～17:00)

*特集展を開催するにあたって下記の文献を参照しました。

石塚 広「近世以後の板締め-藍板締めと紅板締め」

(http://kyokechi.web.fc2.com/itajime_notes.html)

今橋理子「〈月の兔〉の図像と思考(上)」『紀要』3号 学習院

女子大学 2001年

大橋正芳『大橋正芳染色展』東京造形大学 2013年

京紅板締め研究会『京紅板締め』京都芸術大学 1999年

視覚デザイン研究所『日本・中国の文様事典』2000年

島根県立古代文化センター『出雲藍板締めの復元研究』2008年

島根県立古代出雲歴史博物館『よみがえる幻の染色』2008年

並木誠士『日本の伝統文様』東京美術 2006年

*協力機関・協力者一覧

公益財団法人しまね国際センター、大社デザイン、中華人民

共和国駐大阪総領事館、中華文化促進会、東京中国文化セン

ター、文化庁、浅沼政誌、石塚、広、板倉吉彦、大橋正芳、園山

邦彦、孫朝蒼、張琴、長田茂伸、叶玉紅、李琨、梁島